
わらべや -endless song-

魔女persimmon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わらべや - endless song -

【Nコード】

N3827U

【作者名】

魔女persimmon

【あらすじ】

【わらべや】『貴方の求める歌は、なに？』奇怪な事件が毎夜の如く起きる言乃葉町。時給1000円（臨時ボーナス、昇給有り）に釣られた夜守^{よるもり} 都は^{みやこ}、二人の兄妹と出会い、平凡な日常から、平凡な日常へと、踏み込んでしまう。

「俺達は【わらべや】」「わらべ歌を生業とする裏商人」

「お前の「貴様の」求める歌は、なに？」

初話

暗闇にぼうつと、僅かな明かりが灯る。

その僅かな明かりに、膝を立て、不乱に読み物を読む、少女の姿が映し出された。

「おや、いらつしやい」

少女が読み物から目を離し、此方を見やる。

思わずはっと、声を吞む。少女が、此の世の者とは思えぬほど、妖艶で、美しかった。

「わらべやへようこそ」

少女が、ついと立ち上がる。

肩から羽織る着物が、畳に擦れる音がした。僅かに灯る明かりが、ゆらりと揺れた。

「此処は【わらべや】貴方の求めるわらべうたを当店では提供しております」

少女は無邪気に微笑む。

歳に似合わぬ婀娜つぼさが、より少女の美しさを際立たせていた。

「夕焼小焼の、赤とんぼ 負われて見たのは、いつの日か」

少女が急に歌い出した。急な行動に少し驚いたが、鈴を転がした

かのような歌声に、思わず聞き入ってしまった。

「十五でお嫁に行った姐やは、お嫁に行った後、どうなった？」

突然の少女の問い。あまりに突然過ぎて、あ、う、としか答えられない。少女は、ふ、と笑うと、また、歌い始めた。

「^{からす}鳥なぜ啼くの　^な鳥は山に　^{かわ}可愛い七つの　子があるからよ」

さつきとは、違う歌を少女は歌い出した。聞いたことがある。よく夕焼けの下、母が手を繋ぎながら、歌ってくれたのを思い出す。

「ねえ、可愛い七つの子って、七人の子？　それとも、七歳の子？」

そう言われれば、確かにそうだ。この歳になってから、その歌の奥深さに気付く。

「どんな花より　たんぽぽの　花をあなたに　おくりましょう」

いつの間にか、少女が、目と鼻の先の近距離に、立っていた。見つめる黒曜石の様な、光の無い闇色の瞳に、吸い込まれてしまうような錯覚に陥ってしまう。

「たんぽぽの花言葉、あなた知っている？」

何処から取り出したのか？　黄色いたんぽぽを数本束ねた花束を、そつと、手渡された。少女の行動に、抗うことが、出来ない。

「^{うた}唄を忘れた　^{かなりや}金糸雀は　^{うしろ}後の山に　棄てましょか　いえ　いえ
それはなりませぬ」

ああ、思い出した。たんぽぽの花言葉。

「何故、金糸雀は唄を忘れてしまったの？ 本当に忘れてしまったの？」

手に持っている、黄色いたんぽぽの花が、もぞりと、生き物のように動き出す。

「わらべうたには、先人たちの様々な思いが、籠められています」

手の中のたんぽぽが姿を変え、黄色い龍となり、身体に巻きついてくる。

「わらべやに來たからには、先人達に対し、敬意と尊敬、そして、どれか三つの劇を差し出さなくてはならない」

黄色い龍は、身体をぎちぎちと、強く締め上げ、呼吸を、血管を、生命活動を、全て止めるかの如く、ゆっくり、ゆっくりと、締め上げていく。

「一つは喜劇、一つは悲劇、そしてもう一つは、狂劇…」

何処から現れたのか？ 少女と同様に、此の世の者とは思えない、とても美しい青年が、少女の背後に立っていた。

「お前の

貴様の

求める歌は、何？」

首がみしりと音を立て、意識が薄れていく中で、先程思い出した、たんぽぽの花言葉。

【別離】

黄色い花びらが散った時、首の骨が折れる音を、私は確かに、最期に聞いた。

[illegible]

菜の葉に止まれ

桜にとまれ

とまれよ あそべ

あそべよ とまれ

[illegible]

そんな光景を見ると、自分の気持ちまでがぽかぽかと暖かくなり、口元が自然に緩んでしまう。

「あー生暖けえ陽射しに落ちれば塵と化す花弁……全て朽ちてしまえばいい」

「若しくは消えろ。消滅！ 消滅！」

呪詛の如く、否定的な言葉をぶつぶつと呟きながら、少女は腕を上下に振った。

「……………春がお嫌いなんですか？ ユズさん…？」

口元が左に軽く持ち上がり、怒りでぴくぴくと引きつる。

「ああ嫌いだね。暖かくなつたかと思いきや、急に寒くなる。舞い散る姿は美しいが、大量に落ちれば塵となる。全く…意味不明な季節だよ」

「……………」

ぽかぽかと暖かかった気持ちが一気に冷めた。それも絶対零度の如く。

——申し遅れました。わたくし、名前を夜守 都と申します。私立檻桜学園高等部二年生です。今をときめくピチピチのJKでございます。

縁側に座り、漫画をにやにや笑いながら読んでいる少女は夜終 柚子。14歳。染めたような茶色い髪の毛に、病的なほど白過ぎる透き通った肌。それに映えるように、美しく弧を描いた真つ赤な唇。男性だろうが女性だろうが、思わずはっとしてしまふ可憐な顔立ちをしている。

だが注意事項を一つ。彼女は重度のオタクであり、且つレイヤーである。（最近のお気に入り鏡。レン）

わたしと同じ学校に通う後輩でありながら、アルバイトの雇い主でもある。……信じられないだろうが（実際私も信じられない）

「……………ユズさんのせいで一気に気分が冷めました」

「は！ 何がボクのせいだい？ ボクはあくまでボク自身の意見を言つたまでさ！ そう…あくまで、ね？」

「……………」

『黒○事』という漫画を読みながら、横目でにやにやとこちらを見やるユズ。その態度にイラッとしつつも、ユズの艶っぽい瞳に不覚にもどきりと胸が高まってしまった。可愛いんだよ畜生。

「大体ねえミヤコ？ 君は春に色んな思いを巡らせている様だがね、『春』という言葉に、様々な意味があるのを君は知っているかい？」
「意味、ですか？」
「そ」

顎に軽く手を当て、暫し考える。

「ふむ… 春は四季の最初の季節で、陰暦では1月から3月。太陽暦では3月から5月。天文学的には……………」

「ちよちよちよ、ストップ。ミヤコ、ストップストップ！ ボクはそんな難しいことを訊ねた訳じゃあ無いんだけど！」

予想外の答えだったらしく、軽く顔が引き攣っている。慌てふためく姿が、ちよつと面白い。

「ボクは『春』という言葉に注目して考えてもらいたかったんだがね」

はあ、と額に手を置き、わざとらしく大きな溜息をつくユズさん。溜息をつきたいのはこっちの方だ。

「なら回りくどい言い方は止めてさっさと教えてくださいよ？」

呆れながら言ってみると、もっと可愛いおねだりが出来ないのか

ね？ 等とオヤジ臭いことをぶつくさ言われたが、柚子は話し始めた。

「『春』という言葉はだな、草木の芽が『張る』意、また、田畑を『^は壅る』意、そして気候の『晴る』意からと言われているんだ」

「根を張る、開壅する、そして晴れる…なるほど」

「個人的には『晴る』が一番春らしいと思うな！。ほら、この暖かい陽射しがなんとも春らしくて……あ」

口を慌てて押さえるが、時すでに遅し。都が眉をぴくりと上げてこつちを見ていた。

「あの、なんかユズさん、さっき自分が仰った言葉と、かなり矛盾していませんか？ 生暖かい陽射しが嫌いだとかどうとか？」

「まあ『春に三日の晴れなし』と言うしな」

あははははと、話を無理矢理紛らわされた。このやろつ。

「あ、後もう一つ、春に意味があつたの忘れてた」

慌てて話題を変えるかのように柚子は話を振った。

「まーだあるんですか？ 春がお嫌いなのに随分詳しいんですね」

ふふふと笑いながら皮肉ぶると、ミヤコ、少し口が過ぎるよ、と咎められた。あれ？ 私の方が歳上の筈なんだけど……。

「すみませんユズさん。以後気を付けますので、春のもう一つの意味を教えてください」

「けっ、次度を越した物言いしたら給料下げるからな」

それだけは御免蒙りたい。

「色情」

「は？」

「単刀直入に言えばセック「わーっ！　わーっ！？　わーっ！！？」
ス」

何をいきなり言い出すんだこの少女は！？

「なんだよ？」

「いきなり何を言い出すかと思えば！　何故春から下ネタに、話題が変わるんですか！？」

「別の下ネタの話がしたかったから言った訳じゃないんだけど。ただ売春とか買春とかにも春って言葉が入ってるなあってのを思い出し「やめてくださいー！！　春のイメージがぶち壊れですー！！！」

都の悲痛な叫びに答えるかのように、庭の桜の花弁が、ぶわっと大きく舞い上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3827u/>

わらべや -endless song-

2011年11月13日22時53分発行